九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

奴隷の語りをめぐる声と文字の相克 : スレイブ・ナラティブからトニー・モリソンまで

峯, 真依子

https://doi.org/10.15017/1670411

出版情報：九州大学, 2016, 博士（比較社会文化）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名　：峯　真依子

論 文 名　：奴隷の語りをめぐる声と文字の輻湊――スレイヴ・ナラティヴから
　　トニ・モリスンまで

区　　分　：乙

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、元奴隷によって書かれたスレイヴ・ナラティヴから現代のトニ・モリスンの作品に至るまでの、文字と声の相克について考察した。すなわち、奴隷制度下で読み書きが禁止されていたことと、そのことをめぐる葛藤は、どのようにスレイヴ・ナラティヴで描かれてきたのか（「Ⅰ部　声から文字への移行」）、また現代の作家たちにとっては、過去に読み書きが禁止されていたことと、皮肉にも読み書きが禁止されたからこそ育まれた声の語りの文化を、どのような形で、作品に描いているのかを明らかにした（「Ⅱ部　文学における声のイマジネーション」）。

「Ⅰ部　声から文字への移行」においては、19 世紀と 20 世紀の２つのスレイヴ・ナラティヴを中心に考察した。まず「第１章　アンテベラム期におけるスレイヴ・ナラティヴ（1831-1865）」において、奴隷制廃止運動（アボリショニズム）のムーヴメントの中で、アンテベラム期のスレイヴ・ナラティヴが出版されるようになった経緯を確認した。また、逃亡奴隷たちが、アボリショニズムの演説集会で語っていた奴隷制度の体験談が、徐々にスレイヴ・ナラティヴという出版物になっていったことを明らかにし、やがて白人から求められるままに発表していた奴隷制度の証言としてのスレイヴ・ナラティヴが、文学作品として認識されるようになるまでに表現を確立していった過程を明らかにした。

つぎに「第２章　ニューディール期におけるスレイヴ・ナラティヴ（1936～1938）――連邦作家計画（FWP）とアフリカン・アメリカン文学との接点」では、ニューディール政策における連邦作家計画（FWP）のインタビューの中に残されていたスレイヴ・ナラティヴを考察した。FWP スレイヴ･ナラティヴという元奴隷 2,000 人以上の語りが大規模に調査されるに至った FWP の理念と、調査方法を確認した上で、収集された FWP スレイヴ・ナラティヴを、奴隷制時代の識字というキーワードにより分類し検討した。一方、FWP には実は多くのアフリカン・アメリカン作家たちが参加したという意味でも後のアフリカン・アメリカン文学にとって重要な意味を持つことを、ラルフ・エリスンの FWP での仕事を中心に明らかにした。

「Ⅱ部　文学における声のイマジネーション」では、声と文字というテーマがどのように表現されているのかを文学作品から検討した。まず「第３章　『見えない人間』（*Invisible Man*, 1952）における移動と方向の問題――声とリテラシーを手がかりとして」では、主人公のめまぐるしい移動の過程において、識字能力を得ることがすなわち自由を得ることと同義である識字能力をめぐるアフリカン・アメリカンの自由の伝統と、一方で元奴隷によるストーリーテリングが克明に描かれていること、つまりこの作品には、声と識字の相克が表現されていることを明らかにした。

つぎに「第４章　『ミス・ジェイン・ピットマンの自伝』（*Autobiography of Miss Jane Pittman*, 1971）における声の語りのネオ・スレイヴ・ナラティヴ」で、この作品が登場したネオ・スレイヴ・ナラティヴというブームの特徴を、ウィリアム・スタイロンの『ナット・ターナーの告白』を手が

かりに確認し、このブームがアンテベラム期で沈黙させられていた奴隷の声の回復を目指していたことを明らかにした。中でもアーネスト・J・ゲインズの『ミス・ジェイン・ピットマンの自伝』は、作品の中で FWP スレイヴ・ナラティヴを利用することで、奴隷の語りがテクストから音声としての声として聞こえるような錯覚をもたらすテクストを目指しており、テクストで声を表現するという矛盾に挑戦したたことを明らかにした。

さらに「第 5 章　短い口承の語りとしてのアフリカン・アメリカンの名前---『ソロモンの歌』（*Song of Solomon*, 1977）をてがかりとして」で、アフリカン・アメリカンの名前が、文字文化のなかった奴隷制度時代より、彼らにとって最も短い豊かな口承の物語でもあったこと、またときにそれらは記憶の保存、個々のアイデンティティの表現形式であったことを、トニ・モリスンの『ソロモンの歌』に登場するたくさんのユニークな名前を手がかりとして明らかにした。FWP スレイヴ・ナラティヴに登場する名前や、アフリカン・アメリカンの名前の研究史から分析を行った。最後に「第 6 章　肉体をもった奴隷の亡霊-『ビラヴィド』(*Beloved*, 1987)における声と文字の輻湊」において、再びモリスンによる『ビラヴィド』を、奴隷制度の語りと語ることの不可能性というキーワードで分析し、文字として残っていない空白部が霊の存在によって代弁されていることを明らかにした。また、亡霊ビラヴィドの妹は、大学というペンや文字に結びつけられた道へと進む未来、すなわち記録として奴隷制度を残すことを作品が示唆していることを明らかにした。

以上のように、読み書き禁止法の施行されていた奴隷制度の時代のスレイヴ・ナラティヴから現代の作品に至るまでを声と文字の相克をテーマに考察した。アンテベラム期のスレイヴ・ナラティヴは、まず識字を得ることが自由と同義であるように希求した一方で、現代になり文学作品でアフリカン・アメリカン作家たちは、リテラシーをめぐる葛藤を作品に描くと同時に、声の語りをテクストで表現することを目指した。つまり、スレイヴ・ナラティヴからトニ・モリスン作品まで、口承文化と文字によって何かを表現し書き残すことが、つねにテクスト上でせめぎ合ってきた。だが、一方でそのような矛盾をスレイヴ・ナラティヴの時代から抱え込んできたからこそ、アフリカン・アメリカン文学という声と文字が輻湊する希有な文学を生み出したと結論づけた。